兵庫教育大学言語表現学会

2026年度研究発表会・第46回総会

プログラム･要旨集･総会資料

期日：2026年12月６日(日)

会場：兵庫教育大学 神戸キャンパス

兵庫教育大学言語表現学会2026年度研究発表会・第46回総会

会　場：兵庫教育大学 神戸キャンパス 805・806・807・808
主　催：兵庫教育大学言語表現学会（http://gengo-hyogen.org/wp/）
後　援：兵庫教育大学
参加費：無料

・受付(9:30)　兵庫教育大学神戸キャンパス８階ロビー
・研究発表(9:50-14:00)　［１件につき研究発表25分＋質疑応答10分］

・第１会場＝神戸キャンパス805教室

1	9:50-10:25	大野桃代	文学教育とネガティブ･ケイパビリティ育成を連携する高等学校国語科の授業デザイン
2	10:30-11:05	山田真由美	小学校国語科における文章の階層化に基づく文章作成指導について
3	11:10-11:45	田川郁子	言語運用に根ざした文法学習プログラムの再構築―「文節･単語」と「接続表現」を中心に―

・第２会場＝神戸キャンパス806教室

1	9:50-10:25	植木陸仁	高校生を対象とした生成AIとの英語スピーキング活動の効果―外国語教室不安尺度とWTCに着目して―
2	10:30-11:05	平井　都	小学校外国語科におけるExploratory Practiceの可能性
3	11:10-11:45	若松天晴	映画『School of Rock』を活用した中学校英語の言語活動―内発的動機づけと三つの基本的心理欲求に着目して―
	(60分)	昼休憩	
4	12:45-13:20	武内弥生	小学校高学年を対象とした、初期のフォニックス指導と英語の読解練習を組み合わせた指導の効果
5	13:25-14:00	森安祥平･堂本佳樹･鳴海智之	学校外国語科におけるSTEAM教育を基盤とした自律的学習者の育成―デジタル学習基盤を活用したプロジェクト型学習実践の成果と課題―

・第３会場＝神戸キャンパス807教室

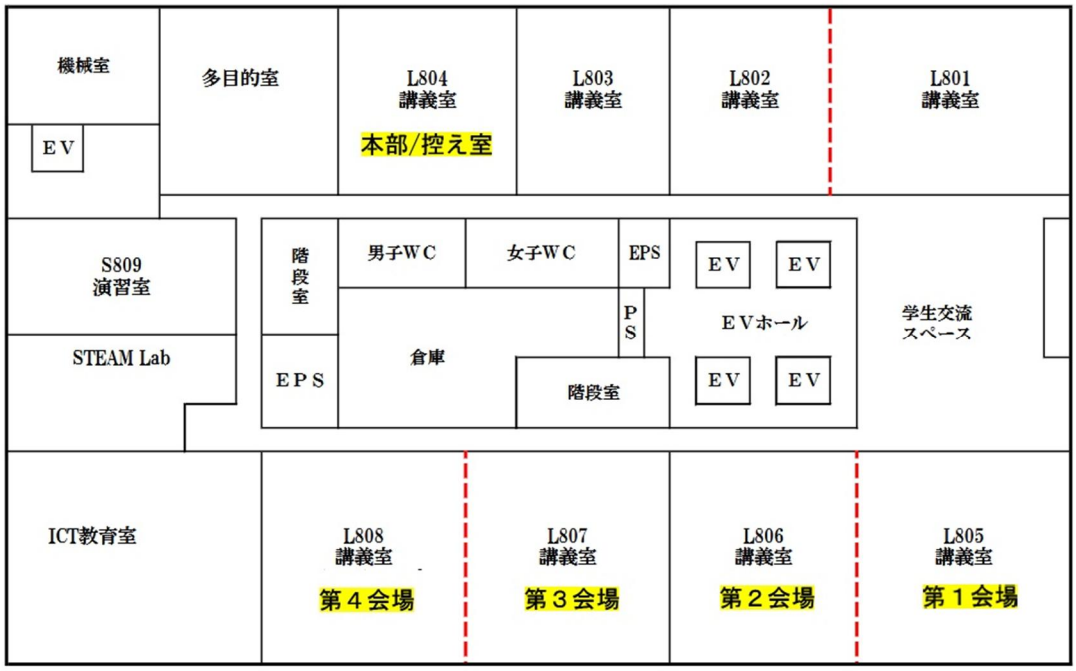
1	9:50-10:25	木上徹也	東井義雄の「調べる読み方学習」の今日的意義―読み方の意識化･自覚化に着目して―
2	10:30-11:05	竹下　葵	生成AIを活用した「書くこと」における相互批評活動の研究
3	11:10-11:45	竹守咲子	自己理解を深め，表現を工夫する力を育む国語科単元の開発―自己のよさを伝えるキャッチコピーの創作活動に着目して―
	(60分)	昼休憩	
4	12:45-13:20	辰巳恵菜	小学校国語科におけるICTを活用した学習支援の研究―「すがたをかえる大豆」の実践を通した思考過程の可視化―
5	13:25-14:00	田中友輝	国語科における情報活用能力育成に関する研究―生成AI(Gemini)による批評を踏まえた脚本推敲の授業実践を通して―

・第４会場＝神戸キャンパス808教室

1	9:50-10:25	魏　蘭蘞	中等教育段階における中国人生徒の友人関係形成過程―異言語話者が混在する学校の相互交流に着目して―
2	10:30-11:05	原田洋行	JSL生徒の「話すこと」に焦点を当てた日本語指導―構成的グループ･エンカウンターを通じて―
3	11:10-11:45	岡﨑由昂	兵庫教育大学における留学生支援と日本人チューターの意識構造―修正版グラウンデッドセオリーアプローチによる分析を通して―
	(60分)	昼休憩	
4	12:45-13:20	山口雄嘉子	校内テストにおける紙への手書き解答に関する教員の意識調査
5	13:25-14:00	川島　翠	言語情報と視覚情報の相互作用による作品解釈の形成の研究―フィビ鳥『とこいわのかみ』の教材化と授業実践を通して―

・総　会（14:15-14:45）神戸キャンパス805・806教室（第１会場・第２会場の連結）
・講　演（14:55-16:25）神戸キャンパス805・806教室（第１会場・第２会場の連結）
　　演題　「ことばの学習を通して他者と自己に向き合う―身近にある異文化理解―」
　　講師　　日本大学教授　町田章先生
・閉　会（16:30-16:40）神戸キャンパス805・806教室（第１会場・第２会場の連結）
・懇親会（17:00-19:00）鮨酒肴 杉玉新長田

8F



＊神戸キャンパスでの飲食について、飲み物は教室でも可能ですが、食事は「学生ラウンジ(７Ｆ)」か「教員控室(７Ｆ)」に限って可となっています。

第１会場805教室

文学教育とネガティブ･ケイパビリティ育成を連携する高等学校国語科の授業デザイン

兵庫教育大学大学院言語系(国語)　大野桃代

本発表の目的は，高等学校国語科における文学教育とネガティブ・ケイパビリティ(以下，NC)を接続させ，認知的共感や限定合理性の中で思考を持続する能力を育成する授業のあり方について検討することにある。

研究の枠組みとして，不確実性や未解決性を孕んだ芥川龍之介「藪の中」を教材として選定し，またNCを教育実践へと援用するために四つの観点を設定した。研究の展開として，ケーススタディー→本文精読→ケーススタディーのように構成し，ケーススタディーは，本文読解前後の生徒の変化を捉えるとともに，文学教材を通して身につけたNCを他の文脈に広げていくことを意図した。実践の結果，「藪の中」の読解後は，NCを捉える四観点すべてにおいて，ポジティブな態度がネガティブな態度を上回った。特に，「認知的共感の形成」においては非常に顕著な結果が見られた一方，「限定合理性の自覚」については，ポジティブな結果は弱かった。

以上から，文学教育とNCの親和性が示された。

小学校国語科における文章の階層化に基づく文章作成指導について

兵庫教育大学大学院言語系(国語)　山田真由美

本発表は，小学校国語科の説明的文章を「書くこと」の指導内容を，言語単位に基づいて階層的に整理し，段落内の文章構成について明示的な指導を行う方法を提案するものである。

具体的には，言語単位に基づいて指導内容を「大」「中」「小」に区分した上で，児童に困難が見られる「中」に着目し，構造図と文章の性質の差異を架橋する手立てを講じる二つの実践を行った。実践１では，文章構成と各文の構成上の役割を規定した結果，多くの児童が必要な役割を満たす文章を作成した一方，段落内の構成と接続表現の使用に課題が見られた。実践２では，使用する情報を規定し，譲歩逆接の展開を条件として文章を書かせたところ，同一の情報を使用したにも拘わらず，論理的な整合性に程度差が見られた。

以上から，「中」という単位を設定することは，事柄間の関係，論の展開，文の接続に関する事項等を重点的に取り上げ，全体指導を行う上で有効であることが示唆された。

言語運用に根ざした文法学習プログラムの再構築―「文節・単語」と「接続表現」を中心に―

兵庫教育大学大学院言語系(国語)　田川郁子

本発表の目的は，中学校および高等学校の国語科において，現行教科書に基づく文法学習の現状と課題を検討し，特に，「文節・単語」と「接続表現」を中心に，実際の言語運用に生かせる文法学習プログラムを再構築することにある。

一つ目の「文節・単語」については，従来のような文節や単語に分けることを重視した学習ではなく，生徒の認知の段階を考慮して自立語・付属語の理解を先行させ，文・文節・単語の階層構造の把握を重視した学習プログラムを構築している。二つ目の「接続表現」については，従来のような分類や用語の理解を重視した学習ではなく，副詞や連語なども含めた接続表現の働きに着目し，文を比較する活動を通して前後の文の関係を考え，文章理解や文章表現に生かす学習プログラムを

構築している。
最終的に，「文節・単語」と「接続表現」について文法学習という枠組みにとどまらず，実際の言語運用に結びつける学習プログラムを提案する。

第２会場 806教室

高校生を対象とした生成AIとの英語スピーキング活動の効果
―外国語教室不安尺度とWTCに着目して―

兵庫教育大学大学院言語系(英語)　植木陸仁

外国語学習では，発話への不安がコミュニケーションを妨げる要因となるが，近年，AIとの対話練習が不安の軽減やコミュニケーション意欲の向上に寄与する可能性が報告されている(Zhang et al., 2024)。本研究では，生成AIとの英語スピーキング活動が高校生の心理面とパフォーマンスに及ぼす影響を検討した。
高校２年生を対象に，生成AIとの対話活動を行ったAI群と，行わなかった通常群に分け，活動の事前と事後に対面スピーキングテストを実施し，外国語教室不安尺度(FLCAS)，コミュニケーション意欲(WTC)，テスト結果の変化を比較した。その結果，FLCASに有意な変化はなく，ＷＴＣは両群共に有意に向上したが，変化量の群間差は有意ではなかった。一方，発話語数と異なり語数はAI群で有意に大きく増加した。以上より，生成AIとの対話活動は不安やＷＴＣへの効果が一貫しない一方，対面での発話量の向上に寄与する可能性が示唆された。

小学校外国語科におけるExploratory Practiceの可能性

兵庫教育大学大学院言語系(英語)　平井　都

本研究は，Exploratory Practice(EP)の枠組みを用いて，小学校６年生の外国語科の授業実践を行い，児童の英語学習に対する価値観と教師の信念の変容を明らかにするものである。EPとは，児童と教師が授業で生じる疑問や気づきをもとに，共同で「教室の生活の質(Quality of Classroom Life)」を理解しながら，その理解を学びづくりに活かす実践者研究の枠組みである。EPをもとに，ALTと校内の先生を英語でつなぐプロジェクトなどを実施し，児童の振り返りや授業中の発話，教師の観察記録等をデータとし，児童や教師の変容を質的に分析した。これまでの分析では，児童は英語を用いて他者と関わる中で，英語使用や英語学習を主体的に意味づけしており，また，教師も児童との共同的な探究を通して，自身が前提としていた児童観や教育観を問い直していたことが明らかになった。

映画『School of Rock』を活用した中学校英語の言語活動
―内発的動機づけと三つの基本的心理欲求に着目して―

兵庫教育大学大学院言語系(英語)　若松天晴

近年，中学校外国語教育においては，生徒の英語学習に対する意欲の低下が課題となっている。特に，生徒は英語の重要性を認識しているものの，学習への興味や楽しさに基づく内発的動機づけは十分に高いとはいえず，受験や成績などの外発的要因によって学習を継続している傾向が見られ

る。そこで本研究では，自己決定理論に基づく「自律性」「有能感」「関係性」の三つの心理的欲求に着目し，オーセンティックな映像メディアを活用した言語活動を実践する。
具体的には，映画『School of Rock』を教材として活用し，生徒が登場人物のセリフを理解・再現しながらロールプレイを行う活動を取り入れる。実際の文脈のある英語のやり取りに触れることで英語学習と実生活との関連を実感させるとともに，協働的な活動や発表を通して成功体験を積み重ねることを目指す。本研究は，このような実践が中学生の自律性，有能感，関係性の向上にどのように関わるのか検討し，オーセンティックな映像メディアを活用した英語授業が内発的動機づけの向上に繋がる可能性について考察することを目的とする。

小学校高学年を対象とした、初期のフォニックス指導と英語の読解練習を組み合わせた指導の効果

兵庫教育大学大学院言語系(英語)　武内弥生

英語圏であるオーストラリアのニューサウスウェールズ州の教育ウェブサイトでは，フォニックス指導における重要なポイントとして，バランスのとれたリテラシープログラムの必要性が強調されている。しかし，小学校高学年の教科書で扱われるフォニックスのルールは限定的であり，読む練習と十分に統合された学習には繋がらない。そこで本研究では，公立小学校の５年生61名を介入群と対照群に分け，フォニックス指導と短い文章を読む練習を組み合わせた23回のプログラムが，児童の英単語および短文の読解力に与える影響を検証した。その結果，単語の読解力は両群とも向上したものの，短文の読解力においては介入群が対照群を統計的に有意に上回ることが示された。さらに事後アンケートからは，読むことに対して前向きな姿勢とより大きな自信を身につけたことが示された。また，児童の発達段階や興味に合わせた読解教材が，内容そのものへの高い関与度だけでなく，達成感や自信も育んだと考えられる。本研究の知見が，小学校から中学校への英語学習の円滑な移行を促進する，効果的なリテラシー指導法の開発に寄与することが期待される。

学校外国語科におけるSTEAM教育を基盤とした自律的学習者の育成
―デジタル学習基盤を活用したプロジェクト型学習実践の成果と課題―

兵庫教育大学附属中学校　森安祥平
日ノ本学園高等学校　堂本佳樹
兵庫教育大学　鳴海智之

本研究は，中学校外国語科において，STEAM教育とデジタル学習基盤を活用したプロジェクト型学習(PjBL)が自律的学習者の育成に及ぼす効果を検討したものである。国立大学附属中学校２年生75名を対象に，外国人旅行者向けの「新たな日本のお土産」を提案する学習を実践した。学習者用デジタル教科書，音読AI判定アプリ，ライティングAIアプリなどを活用しながら活動を行った結果，生徒は相手意識をもち主体的に学習へ取り組み，自ら表現を改善する姿勢を示した。また，英語への苦手意識やライティングへの抵抗感の軽減，自信の向上が見られた。自由記述アンケートの分析からも，デジタル教材を活用した自己調整的な学びの深まりが確認された。以上より，STEAM教育とデジタル学習基盤を組み合わせた実践は，自律的学習者の育成に有効であることが示唆された。一方で，生成AIへの過度な依存を防ぐための指導や，日本語での思考形成を支援する教材開発が今後の課題として挙げられた。

第３会場807教室

東井義雄の「調べる読み方学習」の今日的意義―読み方の意識化･自覚化に着目して―

兵庫教育大学大学院言語系(国語)　木上徹也

本研究は，自立した読者の育成という観点から東井義雄の「調べる読み方学習」の今日的意義を明らかにすることを目的とする。近年の読むことの研究では，読みを支える知識や方略を，他者との関わりを通して学習者自身のものにしていく過程が重視されている。東井の三段階の学習過程も，個で読む･書く「ひとりしらべ」を基盤とし，他者と読みを共有する「わけあいみがきあい」を組み込んでいる。本研究では，東井の実践記録を検討するとともに，その指導法を踏まえた小学４年生の「一つの花」の授業における学習帳の記述を分析した。その結果，他者との読みの交流を通して，場面を関連付ける読みが広がり，自らの読み方を説明し，その有効性を振り返る姿も確認された。以上から，他者との関わりは，読みの誤りを訂正するだけでなく，自らの読みを対象化しそこに働く読み方を意識化･自覚化する役割を持つことに，東井の指導法の今日的意義を見いだした。

生成AIを活用した「書くこと」における相互批評活動の研究

兵庫教育大学大学院言語系(国語)　竹下　葵

本研究は，高等学校国語科において，生成AIから自身の文章への批評を受ける経験が，他者の文章を批評することにどのように関わるかを明らかにすることを目的とする。論理的かつ説得的に表現する力の育成には，文章を書く力だけでなく，自らの文章の課題点を見出し，推敲する力も必要である。そこで，課題点を見出す力を育成する学習活動として，他者の文章を批評する相互批評活動に着目した。高等学校第２･３学年の選択科目「国語表現」において，生成AIによる自身の文章への批評を自分の言葉で整理した後，他者の文章を批評する授業実践を行った。生成AIによる批評と生徒の相互批評の記述を分析した結果，主張と根拠のつながりや説明の十分さ，具体例と主張の関係など，文章の内容や論理展開に着目する観点に共通性が見られた。また，生成AIと指摘内容は異なるものの，共通する批評の視点が用いられている可能性のある事例も確認された。以上から，生成AIから批評を受ける経験は他者の文章を批評する際の視点に関係している可能性が示唆された。

自己理解を深め，表現を工夫する力を育む国語科単元の開発
―自己のよさを伝えるキャッチコピーの創作活動に着目して―

兵庫教育大学大学院言語系(国語)　竹守咲子

本研究の目的は，キャッチコピーの分析と制作を通して，対象のよさを多面的に捉え，価値を見いだし，効果的に表現する力を育む手立てを検討することである。授業では，身近な商品やキャラクターの特徴を分析し，伝えたい情報を選択・焦点化して短い言葉に表した。さらに，四つの視点による自己分析と他者からの気付きを通して，自分のよさを収集・整理した後，表現技法の活用や他者との交流による推敲を重ね，自分のよさを端的に伝えるキャッチコピーを制作し，名刺に表した。

次に，広告分析を通して言葉と画像の組み合わせによる表現効果を学び，それらの配置を工夫したトレーディングカードの制作へと発展させた。

本実践では，自分を表す語彙の広がりが見られたほか，普段の授業では発言が控えめな学級にお

いても生徒同士が活発に意見を交わす姿が見られた。以上のことから，生徒が自分のよさを言葉で捉え直し，その価値を見いだす契機となったと考えられる。

小学校国語科におけるICTを活用した学習支援の研究
―「すがたをかえる大豆」の実践を通した思考過程の可視化―

兵庫教育大学大学院言語系(国語)　辰巳恵菜

本研究では，小学校国語科におけるICTを活用した学習支援の在り方について，第３学年「すがたをかえる大豆」を中心とした授業実践を通して検討した。実践では，児童が考えを広げ，整理し，文章に表す過程を支えるため，コラボノートを活用した。具体的には，イメージマップによる発想，組立メモによる構成の検討，説明文の清書という一連の活動を設定し，各段階の記述を蓄積することで，思考過程を可視化した。児童の記述を比較すると，理由や具体例を加えたり，イメージマップに記した考えを文章として具体化したりする姿が見られた。また，学習の途中経過を確認できることは，教師が児童一人ひとりの考えやつまずきを把握し，支援を検討する手がかりとなった。本発表では，ICTの具体的な活用方法と児童の記述の変化を示し，考えの形成から文章化までを支える手段としてのICTの可能性と，児童の学習状況に応じた活用に向けた課題を考察する。

国語科における情報活用能力育成に関する研究
―生成AI(Gemini)による批評を踏まえた脚本推敲の授業実践を通して―

兵庫教育大学大学院言語系(国語)　田中友輝

生成AIが普及する社会において，出力を鵜呑みにせず情報の妥当性を吟味･評価する情報活用能力の育成が課題となっている。本研究は小説の脚本化および映像化のプロセスに生成AIの批評を取り入れ，生徒の情報を吟味する力と物語の読みを深める指導法の有効性を検証することを目的とする。

中学校第２学年を対象に『少年の日の思い出』を題材とした全５時間の単元を実践した。生徒が作成した場面脚本に対し，指定プロンプトを設定した生成AI(Gemini)から疑問点や不足情報を提示させた。生徒はその批評を批判的に吟味･取捨選択して脚本を推敲し，映像撮影と振り返りを行った。生徒は生成AIの批評を盲従することなく自らの解釈に照らして取捨選択し，演出意図を補う効果的な推敲を行った。また，小説・脚本・映像の表現特性の違いを比較・理解しながら，映像化する姿が見られた。

生成AIの批評を批判的に活用する活動は，生徒の情報吟味・推敲力を高めるとともに，マルチモーダルな表現を通じた深い読解と主体的学びの実現に有効である。

第４会場 808教室

中等教育段階における中国人生徒の友人関係形成過程
―異言語話者が混在する学校の相互交流に着目して―

兵庫教育大学大学院言語系(国語)　魏　蘭蘄

近年，日本の学校では外国人児童生徒の受け入れが進み，異なる言語・文化背景を持つ児童生徒

が共に学校生活を送る機会が増えている。その一方で，外国人生徒が日本人生徒とどのように友人関係を築いていくのかについては，さらに検討する必要がある。そこで本研究では，調査協力校は関西圏内に所在するＡ校であり，中国人生徒を対象に，日本人児童生徒との友人関係がどのように形成・変化していくのかを明らかにする。研究方法は修正版ＭＧＴを用いて分析する。分析を通して，友人関係の形成を促進・阻害する要因についても考察する。

JSL生徒の「話すこと」に焦点を当てた日本語指導―構成的グループ･エンカウンターを通じて―

兵庫教育大学大学院言語系(国語)　原田洋行

本実践は，JSL生徒の「話すこと(発表・プレゼンテーション)」の能力伸長を主目的としたものである。心理的側面を支える手立てとして構成的グループ･エンカウンター(SGE)を活用した日本語指導を行った。文章構成フレームの提示と心理的安全性の確保を目指したＳＧＥの活用により，生徒の発話量･内容･構成にどのような変化が生じるかを検討した。JSL生徒２名を対象に，身近な話題などについて考え，発表し，質問し合う活動を継続して行った。活動の際，自分の主張(選択)と理由を結び付ける段階から，序論・本論・結論を意識した発話への指導を心掛けた。実践を通じた発話データの分析から，理由や具体例，対比を含む表現が見られるなど，発話構成や内容の伸長が確認された。以上のことから，本実践での取り組みが，JSL生徒の発表･プレゼンテーション能力の向上を支える可能性が示唆された。

兵庫教育大学における留学生支援と日本人チューターの意識構造
―修正版グラウンデッドセオリーアプローチによる分析を通して―

兵庫教育大学学校教育学部　　岡﨑由昂

本研究は，兵庫教育大学における留学生支援に携わる日本人チューターの意識構造を明らかにしたものである。最終的にはチューター制度の支援体制を検討することを目的とする。チューター経験者４名の語りを，修正版グラウンデッドセオリーアプローチ(M-GTA)により分析した。分析の結果，チューターは自身の学びや異文化交流を期待して参加し，留学生の希望に応じて支援を具体化する一方，役割の曖昧さ，時間や移動手段の制約，専門的手続きへの対応，関係上の行き違いに困難を感じていた。また，相手から学びや援助を受け取る互恵的な関係を経験し，負担や期待の未充足を抱えながら活動の価値を見いだしていた。こうした意識構造から，役割と裁量の共有，活動中の継続的な相談，チューター同士の交流など，個人任せを補う組織支援の必要性が示唆された。

校内テストにおける紙への手書き解答に関する教員の意識調査

兵庫教育大学言語系教育連合講座　山口雄嘉子

本発表は，校内テストにおいて解答用紙に手書きで解答することについての教員の認識を調査した分析報告である。国や自治体の学力調査でＣＢＴの導入が進む一方，校内テストでは紙への手書き解答が広く用いられている。こうした状況下で，教員が紙への手書き解答をどのように捉えているかを検討することを目的とする。

具体的方法として，小･中･高等学校の現職教員を対象にオンライン調査を実施した。調査では，紙への手書き解答の実施状況と必要性に関する認識を把握した。また，文字の正確な表記や書き直

し･推敲などの評価観点について，紙への手書き解答が不可欠と考えるかを質問した。当日の発表では，紙への手書き解答の実施頻度によって，その必要性に対する教員の認識にどのような違いがみられるかを検討する。さらに，必要性の認識と評価観点別の不可欠性との関係を分析し，校種･担当教科の差異による回答傾向も踏まえて，結果と考察を報告する。

言語情報と視覚情報の相互作用による作品解釈の形成の研究
―フィビ鳥『とこいわのかみ』の教材化と授業実践を通して―

兵庫教育大学大学院言語系(国語)　川島　翠

本発表では，フィビ鳥『とこいわのかみ』を高等学校国語科の教材として取り上げ，漫画表現を根拠とした作品解釈の形成について検討する。本作は，神と人との交流を描く物語であると同時に，色彩，コマ割り，スピーチバルーンといった視覚表現が作品の意味形成に関与している漫画作品である。教材化にあたっては，台詞などの言語情報だけでなく視覚情報にも着目し，それらを関連付けながら作品を解釈することをねらいとした。本発表では，授業実践における生徒の発言やワークシートの記述を分析し，漫画特有の表現への着目が作品理解の深化にどのように結び付いたのかを考察する。また，授業前後の記述の変化をもとに，生徒の解釈がどのように深まったのかについても検討し，漫画を感覚的に読む行為を意識化するとともに，具体的な表現を根拠として読みを構築する学習の可能性と課題を明らかにする。

講演

ことばの学習を通して他者と自己に向き合う―身近にある異文化理解―

日本大学教授　町田 章 先生

言語教育の実践現場はテクノロジーの発達と無関係ではいられない。LL教室やCALL教室に代表されるように，言語教育はこれまでも新しいテクノロジーを積極的に取り入れてきた。そして今，私たちは生成AIという新たな技術を迎えている。この強力なツールは，まさに今，言語教育の現場を大きく変えようとしている。

しかし，生成AIがもたらすインパクトは，単に教育現場で利用できる便利な道具が一つ増えたというレベルにとどまらない。教師はとかく「どのように教えるか」という方法論に目を向けがちであるが，生成AIは「何を教えるのか」という教育内容そのものにまで変革を迫る存在だからである。

以上を踏まえ，本講演では，生成AIがどれほど普及しても決して失われることのない語学教育および言語研究の意義とは何かについて，認知言語学の立場から考えていきたい。

＊　総会資料は，会員の方にのみ会場にて紙媒体で配布します。